

木會街道膝栗毛(その九)

〜藪原宿から鳥居峠まで〜

宿場の所々には、名物の「お六櫛」を売る店が目につくようになりました。両側の茶屋からは呼び声がしきりです。

女「休んでござりませ」

女「木曾の名物『お六櫛』 買ってござりまし」

喜多さんの「ここで一服いたしやしょう」という声に、弥次さんも誘われて茶屋へ入って休む事にしました。店の亭主から女将からみんな出てきて応対です。

亭「お早いお着きです。ゆっくりお休み下さい。

あなた方お土産に桜皮の短冊、

墨流しの短冊を買ってお行きなさんし」

弥「こりゃ木をへいだ短冊だな。

俺はまた経木かと思った」

女「お六ぐし、みつぐし、すきぐし、いろいろござりやす。

お一つ如何ですか」

喜「魚串はねえか」

女「ハイ、この魚づくしの模様のついたのですか」

喜「ナニ、魚を焼くに頭からそれ尻の方へ、

ぐっと突き刺す串の事だ」

女「ハイ、尻へおさしになる櫛はござりませんでな」

喜「ばかばかしいなんのクシの事だかさっぱりわからん。

人が串と言えば櫛という。

一体なんのクシなんだい」

などと、言っているところへ、

年の頃四十に近い尼さんが話しに割って入りました。

木綿合羽の上から高ばしよりして、

風呂敷包みを背負っています。

さっきからこの茶屋で休んでいましたが、

櫛に興味があるらしく、女将に声をかけました。

尼「モシ、その赤い櫛はおいくらですか」

女「これかね、これは六十四文にしてあげませず」

尼「とてもよい櫛ですね。」

でもあんまり大きくて髪にはさしずらそうですね。

そのそっちの櫛はおいくらですか。

どれどれ、それを買いますよう」

女「みつぐしの良いのもございますよ」

尼「それもほしい。買いますよう」

女「これかのし」

尼「この櫛、うらがさすには具合悪くないか、

見て下さいまし」

弥「オヤ、お前さん、土産に買いなさるのかと思ったら、

お前さんがさしなさるんだね」

尼「さうだのし」

弥「ハハハハハ、お前さん。頭に髪もなくてさ」

尼「ほんにそうだっけ。」

私は頭に髪の毛がない事をすっかり忘れとった。

もう櫛はいらないけれど、

やくやく買おうとして見立てたもの。

お寺の長老様にささせず」

弥「お長老様も坊様だろうが」

尼「ほんにそうですね」

喜「思い出してもみなせえ。坊様に違いあるめえ。

そしてお長老様なら男だろうが。」

尼「それぞれ、お長老様は男で坊主頭だったのしー。

おほほほほ」

弥「そんなら、そのお長老様のお大黒へ、

土産にしなさるがよかろう」

尼「ええ。そのお大黒は、おほほ、このわしでござんさあ」

喜「あははははーこいつはできた。

さあ、もう出かけやしよう」

こんなやりとりをしながら、二人は笑いながらこの宿を発つと、その尼さんも二人の後について歩いてきました。

しばらく行くと、後から大声を上げて追いかけてくる者がありました。

振り返ってみると、今休んだ茶屋の亭主が、血相を変え、

汗を振り乱して、追いつくなり、かの尼さんをひっ捕らえて怒鳴りました。

亭「こりゃ、坊主め。

お前さん顔に似合わずおぞい事をしなさる。

今の櫛を出せ」

尼「何を言う。櫛を出せとはなんの事だのし」

亭「ええい。しらばくれるのか。店の櫛が三枚も足りない。

お前が持って来たのだろう。」

尼「何て事を言われるのか。

この人は、わしにふっかけてくるわい。

わしは何も知らん。

あてこともない事を言う人だ。」

亭「やいやい、いい加減にしねえか。

柔らかく言う内に出さないと、

むごい目にあうのはお前さんだぜ。

エエー。肝が煮えくりかえる。

この盗人坊主め」

尼「おいら、何時盗んだ」

亭「何をしらじらしい。

この欲たれめが」

と、亭主は尼さんにつかみかかりました。

尼さんもやっきとなり、むしゃぶりつくど、はげしいつかみあいになりました。

これを見た喜多さんが、「これこれお待ちなせえ。待ちなせえ」と、二人の

中へ入っているいろいろ取り押さえようとしては、
二人は聞かずに互いになおもねじあう始末です。

あちこち宥(なだ)める拍子に、ふと喜多八の懐から紙に包んだ「みつぐし」がパタリと落ちました。

それを見た尼さんは、大声で言いました。

尼「ほら、ごらんなさい。

うちじゃないじゃありませんか。あの人だ」

亭「これだ。これだ。でもまだ一つないぞ」

と、言うのと、喜多八の懐へずーっと手を突っ込み、
もう一枚あるのを取って引き出しました。

亭「お主が盗んだのだな」

喜「俺の懐にあったのかい。

そうだとしりゃ面目もねえ。

しかし、俺あ取らねえ。

大方その櫛が俺の懐に飛び込んだのであろう」

尼「おぞい人だ。

こなたのお陰で、わたしやひどい目にあってしまった」

亭「尼さん、堪忍なせえ。

この野郎がひどいヤツだからだ。

エエいっ盗人めが」

喜多さんは、すっかりしよげかえって、

面目なさそうな表情です。

ことがバレてしまったおかしさに

弥次さんは笑いながら言いました。

弥「ハハハハハ。外聞の悪い男だ。

たかが四十文か五十文の品物を、

いつの間に懐へ入れたものやら。

泥棒根性のあるものは如才ないものだ」

喜「いまいましい。

ちょっとしゃれにやらかした事に足がついてしまった。

ほんと、お比丘尼様にはお気の毒な事をしました。」

茶屋の亭主は、櫛が戻ったのに気をよくして機嫌も直り、
藪原宿の方へ帰って行きました。

三人も、峠を目指して急ぎました。

その時、尼さんが後ろを振り返りながら言いました。

尼「やれやれたまげた。

危ない事よのし。

わしが取ってきたのを見て、

あの亭主が怒り出したと思ったのに、

あなたに災難が降りかかりました。

これを見てください。

私は、これを取って来ました」

と、懐から櫛二枚をそっと出して見せました。

それを見た弥次さんと喜多さんは本当にびっくりしてしまいました。

喜「エエッー。

お前さんもそれを盗んできてたのか。

おいらばかりに恥をかかせたとは。

おおいつ、この比丘尼殿も櫛を二枚取ったぞうーっ」

尼「やれやれ、これは早く逃げるに限ります。

ごめんなさーい」

と、一目散に駆けだして行きました。

それを見ていた弥次さんがしみじみ言いました。

弥「出来心とはいえ、

そんな事をするから逃げて行かなくちゃなんのだ。

俺たちは、金輪際人の物に手などかけずに、

ゆっくり行きましようや」

喜多さんは、赤くなって頭をかきかきしながらうなずくと、

峠をさして歩き出しました。